

カルロスさんが果たしてくれた役割、そして伝えようとしたこと。



土の状態を調べるカルロスさん

「カルロスは全
くうまく
いっていま
せん」と。
「害虫は？
カルロスは
ん！私は正
しく肥料を
施していま
すか？」
と、ほとん

カルロスさんはステッキを使
い、ゆっくり歩を進め、急ぐこ
はなかったという。コーヒー農
園の中で立ち止まり、熟慮
し、周囲を観察する。そして、農
園主に一本の鋤を持ってくる

今は亡き、ジャカランダ農場
のカルロスさん。ブラジル有機
コーヒー栽培のパイオニアと
呼ばれ、自らコーヒーの生産に
取り組むだけでなく、他のコー
ヒー農園を訪れ、生産者に助
言を送っていた。カルロスさん
と多くの農園を一緒に見て
回った農業技師セルジオ・ペ
ジーニさんは、その時の様子を
振り返る。

よう頼んだ。

農園主は、なぜ鋤が必要なの
かが分からなかった。肥料は正
しく投入されているか。バラン
スはとれているか。害虫はいな
いか。早急に対応策を求める農
園主は、カルロスさんに農場全
体を観察して欲しいと、繰り返し
言った。

それにたいして、カルロスさ
んはいつものように静かに、と

にかく鋤をもってきて、その鋤
で地面に穴を掘って土の塊を
すくうよう伝える。そして香り
を嗅ぎ、土の状態を観察し、手
で触れた後に、診断を下す。「こ



コーヒー農園を見て回るカルロスさん(右)と
セルジオ・ペレーニさん(左)

ど激怒寸前の農園主。しかし
カルロスさんは農場の健康で
重要なのは、土壌の健康である
ことを忍耐強く説明した。その
農園の土壌に、命は宿っていな
かった。ミミズも昆虫も、そこ
にはいなかった。その後、農園主
はカルロスさんの言葉を正し
く理解し、生命が息づく農園を
作り上げていった。

そんなエピソードを思い出し
ながら、セルジオ・ペジーニさん
はこう語る。「あの日、私は農業
技師として多くのことを学び
ました。カルロスさんの言葉は

簡素でしたが、深い意味が込め
られていました。その意味とは
未だ多くの農学者や技術者に
は理解されていないものです。」

カルロスさんがコーヒーの有
機栽培をとおして、私たちに伝
えようとしてくれていたことっ
て何だろう？そんな問いかけに
想いを馳せながら、空を仰
ぎ、雲や川が流れていく様を眺
め、そしてコーヒーを飲む……。
と、理解はできなくても何かし
ら伝わってくるものがある。
(ウインドファーム 矢野宏和)



有機栽培の指導にあたるカルロスさん。
有機栽培の普及に情熱を注いでいた。